

永遠の命の至る水 ヨハネによる福音書4章1～15節

細井 茂徳

ヨハネ福音書の第4章に入ります。この第4章の大半を占める部分は「イエスとサマリアの女」と題された42節まで続く長い物語です(3回に分けてお話していくことにします)。今朝の箇所は、主イエスとの出会いと、そのやりとりが記されている場面です。

ここで登場する女性は、単に「サマリア人」というだけでなく、典型的な人間として、時代を超えた『私たち』と通ずる者として捉えることもできるでしょう。もっぱら肉体的な欠乏を満たすもの——特に多くの時間と労力を費やしてやっと獲得することができる、喉の渇きを癒やす水——にしか関心がなかった人と言えるでしょう。魂の幸福は、彼女にとって最も重要な関心事ではなかったのです。そのような者に主の方から出会ってくださり、話しかけてくださるのです。いやそれどころか、その人を生まれ変わらせ、ついには泉のごとく水を湧き出す人として用いて下さるようになる…。そうした出会いが描かれています。

今日の箇所で、このサマリアの女性は主イエスとの対話の中で、付近に流水がないのに彼がどうやってそのような「**生ける水**」を手に入れることができるのかと訝ります。確かにヤコブの井戸には、尽きることのない溜まり水がありました。しかしそれはイエスの話している「**生ける水**」の源にはなり得ないのです。イエスはただメシア(ご自分)だけが、すべての欠乏を満たして永遠の命に至る、命の源となる「**生ける水**」を与えることができる(10, 14節)のだと話されます。民族や宗教的背景が何であれ、また道德上の状態がどうであれ、イエスをこそ世の救い主と認め、彼から命の与える御霊を受け、「**霊と真実をもって**」(23, 24節)神を礼拝する者として『私たち』すべての人々を招いてくださっているのです。私たちも毎週の礼拝を通して、主から「**生ける水**」をいただいてまいりましょう。